



第 48 号  
編集・発行  
信州大学附属図書館  
繊維学部分館  
平成15年7月31日

---

CONTENTS

---

世界のシルクの町へ飛ぶ(4)	分館長	三浦 幹彦	(2)
分館通信 告知板			(7)
分館日誌			(8)
編集後記			(8)

---

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。  
URLは <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html> です。

## 世界のシルクの町へ飛ぶ(4)

分館長 三浦 幹彦

**これまでのあらすじ:**世界のシルクの町を結んで行くという途方もない目標を掲げて「岡谷」から出発した行程は、多くの「シルクの町」を経由して、ロンドン「スピタルフィールド」へとやって来た。

### 1. マクルスフィールド絹織物のルーツ

マードック氏の筆はついに私が探していたものにまで及んだ。

「1831年にスピタルフィールドでは1万4000から1万7000台の織機が稼動しており、約10万の人々が暮らしていた。そのうちの約半数が完全にシルク産業に依存する人達であった。(中略)しかし、蒸気機関の発明で、人力から機械に変わったことで、スピタルフィールドの絹織物産業は大打撃を受けた。この結果、多くの織工たちがマクルスフィールド、コベントリ(<http://www.coventry.gov.uk/cocoon/ourcity/historyofcoventry/index.xml>), プライントリなどイギリス各地へと移っていった。」以前に紹介したプライントリのシルク工場博物館はこの名残である。やはり私の予想は正しかったのだ。スピタルフィールドの職工がマクルスフィールドに移って行ったのである。こうして、「マクルスフィールド縞」として一世を風びした織物技術はロンドン・スピタルフィールドから来ていたのである。

また、これとは別に、スコット著『シルクの話』<sup>編者注1</sup>の中に次のような記述を見つけた。「ユグノーの最大の流入は、熱心なプロテスタントであったエリザベス女王統治下(1558年～1603年)であった。彼女は、難民を歓迎しイギリス南東部での商売を奨励した。難民の中には、Sandwich (<http://www.open-sandwich.co.uk/>), Rye ([http://www.rye.org.uk/about\\_rye.htm](http://www.rye.org.uk/about_rye.htm)), Winchelsea (<http://www.rye-tourism.co.uk/towns/winchelsea.htm>)といったイギリス南部の港町に居を構えた者もいたし、マクルスフィールドのような北部の町に住んだ者もいた。」この記述は、次のような事実を示している。エリザベス女王時代に直接マクルスフィールドに移住したユグノー達をもたらした基本的な絹織物技術の上に、スピタルフィールドに移住したユグノー達がスピタルフィールドの衰退によりマクルスフィールドに移り、新たに最新の織物技術を伝えたという2重構造が浮かび上がる。いずれにしてもユグノーの存在が大きく浮かび上がってきた。

### 2. スピタルフィールド絹織物技術のルーツ

では、このユグノーはどこからイギリスにやって来たのか。これを見つければ、次のシルクの町へ飛ぶ手がかりが得られる。はやる気持ちを抑えながら、マードック氏の記事を追った。

「1681年チャールズ二世(<http://www.spartacus.schoolnet.co.uk/STUcharles2.htm>)は、(中略)すべてのプロテスタント難民にイギリス国民と同じ権利を与えることを通達し

た。これにより、これから数年後のナントの勅令廃止に端を発するフランス織物工の流入、リヨンとツールのユグノー流入のための準備が整ったのである。」ついに、私の目の前に聞きなれた二つの町の名前が現れてきた。ユグノー難民はフランスの「シルクの町」リヨン ([http://www.lyon-city.org/en\\_index.html](http://www.lyon-city.org/en_index.html)) とツール (<http://www.ligeris.com/usa/city.html>) からやって来ていたのである。こうして、さらなるルーツを求めて、次のシルクの町「リヨン」と「ツール」へと飛ぶことになった。

### 3. スピタルフィールドのシルク産業の衰退

ここで、マードック氏の筆を完成させておこう。

「シルクの製造業者は国にとって重要な役割を果たすものとして尊敬をうけた。(中略) 国内シルク産業振興策としてフランスからの輸入品だけでなく、インドからの輸入品に対しても保護関税を課した。インドからは、東インド会社 (<http://www.sscnet.ucla.edu/southasia/History/British/EAco.html>) がシルクのみならず、当時流行したプリントキャラコを輸入した。織工たちの中には路上でこれを身に付けた人達を襲い、引き裂く行動に出るものがいた。(中略)」 氾濫する外国製品に対する攻撃、いわゆる貿易摩擦である。「スピタルフィールドでは、シルク産業は織物だけでなく、あらゆる分野の商売が行われていた。生糸の売買をする商人がいて、彼らは輸入業者でもあった。生糸は主にイタリアとトルコから輸入し、1741年以降はペルシャ(イラン)、ロシア、中国から輸入した。撚糸工も活躍していた。」さらに、「染色工があり、これにデザイナーとパターンメーカーもいた。」「スピタルフィールドで撚糸や紡績(筆者注:絹紡)が行われることもあったし、その他ブライントリヤボッキング ([http://www.thisisessex.co.uk/essex/local\\_interest/towns\\_village\\_s/bocking.html](http://www.thisisessex.co.uk/essex/local_interest/towns_village_s/bocking.html)), イーストアングリア (<http://www.oldcity.demon.co.uk/eastanglia/>) などの場所でも行われていた。1720年から、水力によるシルク工場が各地にでき始めた。」先に紹介したダービーのジョン・ロムの工場は1717年、マクルスフィールドのチャールズ・ローの工場は1743年の創立である。ただし、「(中略) 織工たちは、イギリス製撚糸をイタリアから輸入されるものほど高級品とみなさなかった。(中略) 1764年英国議会は外国からのシルクの輸入禁止法案を可決した。」自国のシルク産業を守るためにとった措置であった。しかし、時代の流れは止められない。スピタルフィールドの絹織物産業も当然のごとく衰退へと向かって行った。これについて、次のような面白い文がある。「渡り職人の織工と親方とのいさかいは、1778年のスピタルフィールド法として知られる法律へと発展していった。(中略) 1790年頃、シルク産業は国内の他の場所に広がり始めた。(中略) 19世紀の始め、スピタルフィールドの雇用安定化のため、ファッション界の指導者たちが協力し、パーティーやその他の催しものでシルク織物の着用を勧めていた。シルクのドレスを持っていない婦人が、自尊心を失うような雰囲気作りを行ったのである。」日本でも着物振興のために国会議員が着物を着てテレビの前に集まったことがあった。どこの国、どの時代でも発想が似ていて面白い。さらに悪いことに、シルク輸入禁止策は「フランスからの大量の密輸を引き起こした。」そこで、「(中略) 1826年に、輸入禁止令を廃止し、代わりに 80

パーセントの関税をかける措置に切り替えた。」しかし、イギリス消費者はフランスのファッションとデザインを自国のものより好んだのである。後のことになるが、フランス・シルク産業はファッション、デザインに関する優位性を最大限に利用した。スコットの言葉を借りれば「フランスではテキスタイルデザインに力をそそぎ、デザイナーが重要な役割を果たした。リヨンのシルク産業を救ったのはこうしたテキスタイルデザイナー達の努力である」とのことである。芸術・工芸への取り組みが重要な役割を果たした。フランス、イタリア、イギリスを中心とするヨーロッパでは、蚕と糸と絹織物生産だけを行っていた場所は、早い時機から、シルク産業の舞台から消えて行ったのである。現在、残っている地はいずれも、その地で大事に育て上げたファッション、デザインが重要な役割を果たしている場所である。現在の日本のシルク産業もこうしたヨーロッパのシルク産業の歴史を参考にする必要があるかもしれない。

「これに追い討ちをかけたのが、1860年のフランスとの通商条約である。この結果イギリスマーケットに魅惑的で安い外国製織物があふれることになった。(中略)1895年、スピタルフィールド最後のシルク製造会社がブライントリに移った。」こうして、スピタルフィールドから絹織物産業が消えて行ったのである。

#### 4. 日本との関係

しかし、ロンドンには別の形でシルクが残ることになる。これには日本が重要な役割を果たしている。「1858年、日本はイギリス、アメリカと通商条約を締結した。数年後、ロンドンで開催された万国博覧会において日本の芸術工芸がヨーロッパの人々に紹介された。この東洋の工芸に影響を受けて、東洋シルクを扱う店が現在のロンドン・リージェントストリートに开店し、ここの従業員であったアーサー・リバティ (<http://www.spartacus.schoolnet.co.uk/BUliberty.htm>) が1885年に自分の店を开店したのが、いまの「リバティ」 ([http://www.liberty.co.uk/store/store\\_home.htm](http://www.liberty.co.uk/store/store_home.htm)) の始まりである。こうして、イギリス人デザイナーにより東洋デザインを織り込んだ」(『シルクの話』) 製品が人気を博して行ったのである。こうした背景を考えると、多くの日本人観光客がリージェントストリートの「リバティ」に集まるのも不思議ではない。また、この頃、別の形で日本はヨーロッパのシルク産業に大きく貢献することになる。蚕に発生した伝染病のため、ヨーロッパのシルク産業は大打撃を受けた。これを救ったのが日本の蚕種である。イタリアでベストセラーとなった、南フランス蚕種製造業者の日本への蚕種買いつけの旅とそれに伴う少しエロチックな雰囲気を持つ小説『シルク』<sup>編者注2</sup>は、この時代を背景に、蚕の伝染病と日本との関係を題材とした話である。

話は少しずれるが、さらに、スコット著『シルクの話』は現代の日本について次のように記している。「最近、日本の芸術家、デザイナー、シルク技術者は多くの新しく先進的な生地や織物を作り出した。特に化繊や化繊と天然繊維との混紡によるものなどである。日本のデザイナーは、またファッションに大きな影響を与え、新しい形や生地を作り出している。こうした全く新しく、それでいて、真に日本的な方法は、長い伝統に根差したもので、

あらゆる点で完璧性を追求するところから発展しているものである。デザイナーの中でただ一人をあげるならば、天才三宅一成 (<http://www.isseymiyake.com/>) であるが、彼の才能を表現しようとするれば、従来のファッションという言葉の領域をはるかに超えたような用語を作り出さなければならないだろう。彼はあらゆる繊維を利用しているが、彼のシルクを利用した創意性は、伝統的な利用や使用の概念に挑戦するものである。」とほめたたえている。その他、シルクデザイナーのしほりをはじめとする日本の伝統技術への取り組みをたたえている。

## 5. さらなるシルクの町へ

さて、世界のシルクの町を結ぶ私の話は、これからイギリスを離れて次のシルクの町、フランスのリヨンとツールへと飛ぶことになった。フランス特急 TGV の時刻表によれば ([http://www.tgv.com/homepage/index\\_uk.htm](http://www.tgv.com/homepage/index_uk.htm))、パリ「リヨン駅」から 30 分ごとに列車があり、約 2 時間ほどでリヨン (<http://www.lyon-france.com/pages/en/>) に到着する。また、駅を出て 15 分ほど進んだ、人通りの少ない通りに、フランス・シルクの粋を集めたりリヨン繊維博物館がある。場所を確かめたところで、フランスから先についてはまた別の機会に残しておこう。この後のルーツ探しは、リヨンおよびツールの絹織物技術のルーツであるイタリアのルッカ (<http://www.provincia.lucca.it/uk/cultura.asp>)、ジェノア (<http://www.comune.genova.it/>)、ベニス (<http://europeforvisitors.com/venice/>)、フローレンス (<http://english.firenze.net/>) へと飛びことになる。よく考えれば、シルクロード (<http://www.ess.uci.edu/~oliver/silk.html>) を逆にもどることになるので、さらには、イラン (<http://www.itto.org/>)、トルコ (<http://www.turkey.org/intro.html>) などを経て、中央アジアのシルクの町へ飛ばなければいけないだろう。いずれ日本各地の「シルク町」へもどることになるが、このシリーズは、ここで終わらせていただく。(興味のある方には以下の本を推薦)

- ・ Jacques Anquetil. Silk. Flammarion, 1995, 200p.
- ・ Luca Mola. The silk industry of Renaissance Venice. Johns Hopkins University Press, 2000, 457p.
- ・ Giovanni Federico. An economic history of the silk industry, 1830-1930. Cambridge University Press, 1997, 259p.

いずれにしても、「シルクの都」岡谷から始まり、アメリカ「シルクの町」パターソン、イギリス「シルクの都」マクスフィールド、イギリス「近代的シルク工場発祥の地」ダービー、イタリア「ピエモンテ地方」、イギリス「織工の町」スピタルフィールド、フランス「シルクの町」リヨンおよびツールを結ぶことができた。これは世界に散らばる「シルクの町」のほんの一部である。また、世界のいろいろな場所で、新しいシルクの町が生まれている。日本のシルク技術はブラジル (<http://www.bratac.com.br/>) を中心に世界各国で、イタリアの製糸技術はパラグアイで活躍している。多くの発展途上国から日本にシルク技術者の派遣要請が来るが、すでに技術者が高齢になり、要請には応えられない状況が起きていると聞く。大学や試験場を退職した後に、こうした国に赴き指導している人々も少な

くない。日本の貢献により、世界中に新たなシルクの町ができつつある。私の所にも世界のいろいろな国からシルクの全分野に渡り、いろいろな問い合わせのメールがやってくる。他に助けを求める所がないとのことなので、できるだけ協力し、質問の分野を考えながら少なくなってしまう専門家に振り分けているが、とても全てに返事ができるものでもない。忙しくてほっておくと、直接国際電話がかかってくることもある。「アウアウ、フガフガ」言いながら、意味不明の対応をするのも楽ではない。

## 6. パーソナル・ネットワークへ

当然のことながら、世界各国の「シルクの町」で独自の技術や文化を保存継承し、新しい産業の出発点とする試みが行われている。シルク産業が全く消え去り、そのおかげもほとんど残っていない場所でも、新しい生活形式の中に、忘れ去られた土地の文化を生かし独自の文化を作り上げようという努力も行われている。外国出張のおり、時間を見つけて、こうした場所のシルク関連施設や博物館を訪れることにしている。これまでに、多くの国の人々に大変お世話になった。というのも、こうした場所で一般公開されているのはごく一部であり、本物や膨大な資料は、ほとんど付属の研究施設や保管庫に保存され非公開となっているので、そのつど個別に対応してもらわなければならない。リヨンの繊維博物館を始めとして、マクスフィールド工場博物館の館員の方々、スピタルフィールド地区を案内してくれたロンドン美術学校の先生、わざわざ私のために非公開の古代シルク織物の再現作業を見せてくれた中国蘇州シルク博物館 (<http://www.chinavoc.com/arts/museum/szhsilk.htm>) の銭館長、やはり非公開の膨大なシルク関連資料を惜しげもなく見せ、数時間にも渡り丁寧な説明をしてくれたアメリカ・ヒスパニック協会シルク博物館部門 (<http://www.hispanicsociety.org/>) のデル・アラモ館長、これからお世話になるイタリア・コモシルク博物館のガルシア館長など、一人一人あげたらきりが無い。いま振り返ると、私の世界の「シルクの町」を結ぶ試みは、ひょっとすると、世界各地でシルクに携わる人々のパーソナル・ネットワーク作りの試みであったのかもしれない。(終)

文中に出てくるホームページは分館長が原稿を書かれた時点のものです。  
そのため Library 発行時につながらないものがあるかもしれませんがご了承ください。



編者注 1)

Philippa Scott. The book of silk. Thames and Hudson, 1993, 256p.

編者注 2)

Alessandro Baricco. Silk. Harvill Press, 1997, 91p.

# 告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。

次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板  
や繊維学部分館ホームページ(<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/>)で  
ご案内していますので、そちらをご覧ください。

## ⇒ 夏季休業中の開館日程について

- ◇ 夏季休業中(7月30日(水)~9月30日(火))は、開館時間が17:00までに短縮されます。
- ◇ 土曜開館は行いませんのでご注意ください。
- ◇ 8月18日(月)~8月29日(金)は、図書点検作業のため臨時休館とさせていただきます。  
ご不便をおかけしますがよろしくお願いいたします。

月~金	9:00~17:00
土日祝	休館
8/18~8/29	臨時休館

業務内容は通常どおり行います。  
2階閲覧室には冷房が入っていますのでどうぞご利用ください。

## ⇒ 夏季休業中の特別貸出について

夏季休業にともない、下記のとおり貸出期間を延長します。

貸出開始日	大学院生	平成15年6月30日(月)	10冊以内
	学部4年生		8冊以内
	学部2・3年生	平成15年7月16日(水)	5冊以内
	研究生・聴講生		3冊以内
返却期限日	平成15年10月1日(水)		

(返却期限日を忘れずに!!)

## 分館日誌 分館日誌

(4月～6月)

- |      |                             |                   |
|------|-----------------------------|-------------------|
| 4/21 | 館長・副館長会議(第1回)<br>[附属図書館会議室] | 出席者—三浦分館長<br>内海係長 |
| 5/13 | 学術情報・図書館委員会(第1回)<br>[SUNS]  | 出席者—三浦分館長<br>太田委員 |
| 5/14 | 図書委員会(第1回)                  |                   |

### 編集後記

先日信毎で紹介されていた、佐久の園城寺のアジサイを見に行ってきました。少し小高い所にあつて、狭い道を車で通るのが大変でしたが、見晴らしも良く、雨に濡れたアジサイがとても鮮やかでした。梅雨には梅雨の楽しみがあるといったところでしょうか。それにしても今年の7月は毎日涼しく、暑いのが大の苦手な私ですら本格的な夏が待ち遠しい気分になります。

さて、今号で三浦分館長のシリーズが無事最終回を迎えました。第1回で宣言されたとおりの長編となり、先生には心よりお疲れさまでしたと申し上げたいです。これに懲りずに(?)またぜひご寄稿いただければ非常に幸いです。お忙しいところ本当にありがとうございました。

次号は10月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますのでご意見・書評など何でもお寄せください。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、[jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp](mailto:jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp) です。